

ダニエル書 - 第58番

封印が解かれた叡智：三者連合と預言における666の謎を探究する

Jeff Pippenger

2024-01-22

いくつかの証しによって、歴史においても預言においても、ローマは常に第八として現れ、しかも七つのうちに属していることが確立されてきた。この象徴にまつわる預言的な謎は、恩恵期間の終わりの直前にユダ族の獅子が封印を解く事柄の一部である。キリストは決して変わられず、ミラー派の歴史における第一の失望と大失望において、彼はその失望の謎を解き明かす真理を明らかにされた。

ミラー派の歴史における最初の失望の後、彼は1843年の図表に示されていたいくつかの数値に含まれていた誤りから、その御手を取り去った。その誤りは、失望を生み出した預言に関する誤解を表していた。ミラー派は最終的に一連の理解へと導かれ、それによって二千三百日の起点が確固として定められた。十字架の日付に主として基づく確かな起点を得ると、彼らは、1843年を特定するために用いていたのと同じ預言的証拠が、実は1844年だけでなく、1844年10月22日というその日付そのものまでをも指し示していることを見いだした。

第二の大失望の後、主は再び、1844年10月22日がキリストの再臨であると誤って宣言したことによって生じた預言上のあらゆる難題に答える真理を明らかにされた。主は聖所の教理とそれに関連する諸真理を明らかにされ、大失望は解明された。

私たちは民として、預言の熱心な学徒であるべきであり、ダニエルとヨハネの幻において明らかにされている聖所の主題について、十分に理解するに至るまで休んではならない。この主題は、私たちの現在の立場と働きに大いなる光を投げかけ、神がこれまでの私たちの経験を導いてこられたことの紛れもない証拠を与える。またそれは、1844年の私たちの失望を説明し、清められるべきものは私たちが想定していたように地球ではなく、そのときキリストが天の聖所の至聖所に入れ、そこでその祭司職の終結の務めを行っておられるのだということを示す。これは、天使が預言者ダニエルに語った「二千三百日まで、それから聖所は清められる」という言葉の成就である。

「第一、第二、第三の天使の使命に関する私たちの信仰は正しかった。私たちが通過してきた大いなる道しるべは動かされることがない。地獄の軍勢がそれらを土台から引きはがそうとし、成功したと思って勝ち誇ったとしても、彼らは成功しない。これらの真理の柱は永遠の丘のように堅固に立ち、人間のあらゆる努力がサタンとその軍勢の努力と結び合わさっても、動かされることはない。私たちは多くを学ぶことができ、これらの事がそのとおりかどうかを確かめるために、絶えず聖書を調べるべきである。神の民は今や天の聖所に目を注ぐべきである。そこでは、さばきの業における私たちの偉大な大祭司の最後の奉仕が進行しており、彼はご自分の民のためにとりなしておられる。」 Review and Herald, 1883年11月27日。

十字架刑の際に弟子たちが味わった失望は、キリストが十字架において打ち立てようとしておられた御国についての誤った理解に基づくものだった。バプテスマのヨハネと使徒

パウロの奉仕には、文字どおりのイスラエルと文字どおりの地上の聖所の経綸が、靈的イスラエルと天の靈的な聖所へと移行したことを明らかにする働きが含まれていた。ユダ族の獅子は、いつも「賢い者たち」に失望の意味を解き明かす。「第八であるが、七つの中の一つである」とされるローマに関する預言的な謎の解明は、ユダ族の獅子が2020年7月18日の失望を説明するために行っている働きの一部である。

ミラー派はローマを聖書の預言における第四の王国と見なし、異教と教皇主義を区別してはいたが、教皇ローマを聖書の預言における第五の王国とは見なせなかった。1844年の直後に、先駆者たちはアメリカ合衆国が聖書の預言における次の王国であることを認識した。

その認識は1850年のパイオニア・チャートに示されているが、黙示録17章に示されているとおりの聖書預言における諸王国の全体像を認識する力は、彼らの理解の及ぶところではなかった。なぜなら、彼らは1863年に「七つの時」を退けた後、ラオディキアの荒野をさまよい始めたからである。

古代イスラエルの歴史は、アドベンチスト教会の過去の経験を鮮やかに例証している。神は、エジプトからイスラエルの子らを導かれたように、再臨運動においてもご自分の民を導かれた。大失望のとき、彼らの信仰は、紅海におけるヘブライ人の信仰が試されたのと同じように試された。もし彼らが、これまでの経験の中で共にあった導きの御手をなおも信頼していたなら、神の救いを見たであろう。もし1844年にその働きに一致協力したすべての者が、第三天使のメッセージを受け、聖霊の力によってそれを宣べ伝えていたなら、主は彼らの努力とともに力強く御業をなさったであろう。あふれるばかりの光が世に注がれたであろう。ずっと以前に地の住民は警告を受け、終わりの働きは完成し、キリストはご自分の民の贖いのために来られたことであろう。

イスラエルが荒野を四十年さまようことは神のみこころではなかった。神は彼らをまっすぐにカナンの地へ導き、そこで彼らを聖く幸いな民として打ち立てることを望まれた。しかし「彼らは不信仰のために入ることができなかった」。Hebrews 3:19. 彼らの退転と背教のゆえに、彼らは荒野で滅び、他の者たちが起こされて約束の地に入った。同様に、キリストの来臨がこれほど長く遅らされ、神の民がこの罪と悲しみの世にこれほど多くの年月とどまることも、神のみこころではなかった。しかし不信仰が彼らを神から引き離した。神が彼らに委ねられた働きを行うことを彼らが拒んだので、他の者たちが起こされてそのメッセージを宣べ伝えた。世へのあわれみのゆえに、イエスはご自身の来臨を遅らせておられる。罪人が警告を聞く機会を得て、神の怒りが注がれる前にイエスのうちに避けどころを見いだすことができるためである。『大論争』458ページ。

ジェームズとエレン・ホワイトはともに、1856年にその運動がラオディキアの運動へと移行したと指摘した。また、直前の一節で彼女は、「もし1844年にその働きにおいて一致して労したすべての者が、第三天使のメッセージを受け、聖霊の力によってそれを宣べ伝えていたなら、主は彼らの努力を通して力強く働かれたであろう」と述べている。さらに彼女は、「同様に」古代イスラエルが示した「退歩と背教」が、古代イスラエルを「荒野で滅びさせた」と言う。この一節は、「真夜中の叫び」のメッセージを宣べ伝えた人

々がまだ存命だった時期に、ラオディキア的アドベンチズムが荒野をさまよい始めたことを示している。

今日、神学者（学識ある者）たちは、ヨハネの黙示録17章に対するさまざまな適用を見いだしており、それらはイエズス会が考案した未来主義の方法論に由来するか、背教的プロテスタントの墮落した神学的実践に由来するものである。黙示録17章の象徴は非常に単純である。必要な象徴はすでに特定したので、そこに表されている諸王国に立ち返り、それらをダニエル書2章の諸王国と対応させよう。というのも、イエスはいつも、物事の終わりをその始まりによって示すからである。

また、王は七人いる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、もう一人はまだ来ていない。そして、その者が来るときには、短いあいだだけとどまらねばならない。かつて在り、今はないその獣は、実に第八の者であり、七人の一人であって、滅びに至る。あなたが見た十本の角は十人の王で、まだ王国を受けてはいないが、獣とともにひとときのあいだ、王としての権威を受ける。黙示録 17:10-12。

第三節で、ヨハネは霊的に1798年へと運ばれた。その歴史の視点に立って、彼はすでに倒れていた五つの王国があると告げられた。それらは、バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャ、異教ローマ、そして教皇ローマであった。ウィリアム・ミラーは第十七章のこの箇所を解き明かせなかった。教皇ローマが異教ローマとは別個の王国であると認識できなかったからである。だがその順序は黙示録の十二章と十三章で扱われている。十二章の竜は異教ローマを表し、十三章で海から上ってきた獣は教皇制であり、地の獣は合衆国である。ホワイト姉妹はこれら三つの獣を、竜と獣と偽預言者として特定している。彼女の証しにおいて彼女は王国の順序を示しており、その順序は私たちが黙示録十七章に適用している理解と一致している。

大いなる赤い竜、豹のような獣、そして小羊のような角を持つ獣という象徴によって、神の律法を踏みにじり、その民を迫害することをとりわけ行う地上の諸政府がヨハネに示された。この戦いは時の終わりまで続く。聖なる女とその子らに象徴される神の民は、きわめて少数派として示されていた。終わりの日には、なお残りの者だけが存在していた。これらの者について、ヨハネは「神の戒めを守り、イエス・キリストの証しを持つ者たち」と語っている。

異教を通して、そして次いで教皇制を通して、サタンは多くの世紀にわたり、地上から神の忠実な証人たちを消し去ろうとしてその力をふるった。異教徒と教皇派は同じ竜の霊に駆り立てられていた。両者の違いはただ、神に仕えるふりをする教皇制のほうが、より危険で残酷な敵であったという点だけである。ローマ教を手段として、サタンは世界を虜にした。神の名を掲げる教会はこの惑わしの陣営に取り込まれ、千年以上のあいだ、神の民は竜の怒りのもとで苦しんだ。そして教皇制がその力を奪われ、迫害をやめざるをえなくなったとき、ヨハネは、竜の声に呼応し、同じ残酷で冒険的な業を推し進める新しい勢力が台頭するのを見た。神の教会と律法に対して戦いを挑む最後のこの勢力は、子羊のような角を持つ獣によって象徴された。

「しかし、予言の筆の厳しい筆致は、この平和な光景に変化が訪れることを明らかにする。子羊のような角を持つ獣は竜の声で語り、『自らの前にいた第一の獣のもつあらゆる権勢を行使する』。予言はまた、それが地に住む者たちに獣の像を作るように

と言うであろうと宣言し、さらに『小さい者も大きい者も、富む者も貧しい者も、自由人も奴隷も、みな右手か額に印を受けるようにさせ、また、その印、あるいは獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、だれも買うことも売ることもできないようにする』と言う。かくして、プロテスタント主義は教皇制の足跡をたどる。」 Signs of the Times, 1899年11月1日。

最後の箇所第一段落で、ホワイト姉妹は、異教ローマ、教皇ローマ、そしてアメリカ合衆国を「地上の政府」として挙げている。第二段落では、彼女は「異教を通して、そして次に教皇制を通して」と述べ、さらに「教皇制がその力を奪われ、迫害をやめざるを得なくなったとき、ヨハネは、竜の声に呼応し、同じ残酷で冒瀆的な働きを推し進めるために台頭してくる新しい権力を見た」と言って、これらの政府が順次に現れたことを示している。だが彼女はそこでとどまらない。第三段落では、アメリカ合衆国が全世界に別の王国を押しつけることになると示している。彼女はこう述べている。「小羊のような角を持つ獣は竜の声で語り、『彼の前にいた第一の獣が持っていたすべての権力を行使する』。預言は、彼が地に住む者たちに、獣の像を造るようと言うだろうと告げている。」

黙示録12章と13章は、異教ローマ、教皇ローマ、アメリカ合衆国、そしてアメリカ合衆国によって立てられる世界的な「獣の像」を指し示している。「獣の像」の定義は、教会と国家の結合である。全世界が獣の像を立てるということは、定義上、終末において一つの世界政府が全地に強制されることを示している。その王国は国家と教会から成り、その関係を教会が支配する。黙示録12章と13章は四つの連続する王国を示しており、その同じ王国は黙示録17章にも、またダニエル書2章にも表されている。

1798年、ヨハネは、聖書の預言における最初の五つの王国がすでに倒れており、そして1798年には一つの王国が存在していたことを見た。1798年に始まった聖書の預言の王国は、『黙示録』13章の地の獣であり、小羊のように始まったが、やがて竜のように語るようになる。アメリカ合衆国は、致命的な傷を受けた第五の王国である霊的バビロンに続く、二本の角を持つ聖書の預言の第六の王国である。第五の王国は霊的バビロンであり、最初の王国である文字どおりのバビロンによって予表されていた。二本の角を持つ第六の王国は、銀の二本の腕によって予表されていた。

1798年には、まだ将来にある王国があるはずであった。というのも、1798年には「もう一つはまだ来ていない」からである。その第七の王国が歴史に現れるとき、それは「短い期間だけ続く」。第五の王国は致命的な傷を受け、第六の王国には二本の角があり、第七の王国はごく短い期間しか続かない。その箇所の文脈は、第七の王国が「十人の王」によって表されていることを示している。なぜなら、「十人の王」が王国となるとき、彼らは「一時間」しか支配せず、この「一時間」は短い「期間」だからである。「十人の王」が統治するとき、彼らは獣と共にその「一時間」を支配する。

あなたが見た十本の角は十人の王で、彼らはまだ王国を受けてはいないが、獣とともにひととき、王としての権威を受ける。ヨハネの黙示録 17:12

「十の角」は第七の王国であるが、彼らは「一時間」のあいだ獣とともに統治する。「一時間」とは、アメリカ合衆国で間もなく制定される日曜法によって始まる日曜法の危機

の期間である。彼らは主要な王であるアメリカ合衆国によってそうすることを強いられるため、獣とともに統治することに同意する。先ほど引用した箇所ではホワイト姉妹は、神の民を迫害する最後の権力は地の獣であると明言している。

「ジョンは、竜の声に同調し、同じ残酷で冒瀆的な働きを推し進める新しい勢力が台頭するのを目にした。この勢力は、教会と神の律法に戦いを挑む最後のものであり、子羊のような角を持つ獣によって象徴された。」『時代のしるし』1899年11月1日。

聖書の預言における最後の王国は、偽預言者としてのアメリカ合衆国が行う欺きによってもたらされる。王国は1798年に子羊として始まったが、終わりの時には、世界に獣の像を受け入れさせる。この獣の像とは、定義上、教会と国家の結合であり、その関係を教会が支配するものである。その王国はまた、三重の連合としても知られている。

「米国のプロテスタントは、隔たりを越えて手を差し伸べ、心霊主義の手を握ることにおいて先頭に立つだろう。彼らは深淵を越えて手を伸ばし、ローマの権力と手を結ぶだろう。そしてこの三者連合の影響のもとで、この国は良心の自由を踏みじめる点でローマの跡を追うことになる。」『大論争』588。

三者連合とは、竜と獣と偽預言者から成る連合で、彼らは黙示録16章で地上の王たちのもとへ出て行き、世界をハルマゲドンへと導く。

そして私は、かえるのような三つの汚れた霊が、竜の口から、獣の口から、また偽預言者の口から出てくるのを見た。彼らは奇跡を行う悪霊であり、地上の王たち、すなわち全世界の王たちのもとへ出て行って、全能の神の大いなる日の戦いに彼らを集めるのである。黙示録 16:13、14。

「ローマの権力」は、教皇権であり、獣であり、致命的な傷を受けた聖書の預言における第五の王国である。「プロテスタント」は、偽預言者であり聖書の預言における第六にして最後の王国であるアメリカ合衆国を表す。「心霊主義」は国際連合、すなわち竜であり、獣と共に一時間だけ支配することに同意する王国である。三者連合は、黙示録十一章の「大地震」の「時」に当たる「一時間」の間に成立する。この「一時間」とは、まもなく来る日曜法のことである。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

ダニエル書2章では、金の頭で表される聖書預言の第一の王国であるバビロンは、聖書預言の第五の王国である霊的バビロンを象徴している。メディアとペルシャの二つからなる王国、すなわち銀の肩と腕、ダニエル書2章における聖書預言の第二の王国は、二本の角を持つ地の獣、アメリカ合衆国、すなわち聖書預言の第六の王国を表している。ダニエル書2章の像の青銅、すなわち聖書預言の第三の王国であるギリシャを表す部分は、国際連

合、すなわち「一時の間」存続する第七の頭を表し、竜と獣と偽預言者の三者連合の中での地位を受け入れることに同意する。

ダニエル書第2章の鉄の王国、すなわち聖書の予言における第四の王国は、七つのうちの八番目の王国を表している。文字通りの異教ローマ、第四の王国は、現代のローマを表しており、それは教会と国家の結合によって構成された王国で、その関係においては教会が支配している。その王国は本質的に三重である。というのも、「十人の王」の筆頭の王は第六の王国であり、それは地の獣だからである。第六の王国はアハブであり、彼はイゼベルと結婚していた。第六の王国がその三重の結合として表されるとき、それは現代のローマであり、その前には第五の王国である教皇ローマがあり、その前には第四の王国である異教ローマがあった。

ミラー派はローマを第四にして最後の王国としか見ていなかった。彼らはそれが本質的に二重の性格をもつことは認めていたが、その後が続くほかの地上の王国は見いだせなかった。第四の王国は異教ローマであり、これに続く第五の王国が教皇ローマ、さらにそれに続く第六の王国が近代ローマである。第六の王国は、ローマの三つの形態のうちの第三である。

竜と獣と偽預言者の三者連合は、現代のローマであり、また致命的な傷の癒えた大いなるバビロンでもある。アメリカ合衆国、国際連合、そしてツロの淫婦は第八にして最後の王国を表しているが、彼ら三者はいずれも第六の王国の三者連合における同盟者であり、それは「教会と神の律法に戦いを挑む」最後の権力である。

アメリカ合衆国は第六の王国の三分の一である。三重連合の一部である国際連合も第六の王国の三分の一であり、教皇権もまた第六の王国の三分の一である。この段階では、アメリカ合衆国の数は六であり、国際連合の数も六、教皇権の数も六である。この三重連合は人の数、すなわち「罪の人」の数を表しており、その数は六六六である。

ここに知恵がある。思慮のある者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。ヨハネの黙示録 13:18。

第六にして最後の独立した王国はアメリカ合衆国である。しかし、それは偽預言者であるがゆえに世界を欺く。

彼は第一の獣の前でそのすべての権威を振るい、致命的な傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。また彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から地上に火を降らせた。そして彼は、獣の前で行う権威を与えられていたそれらの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けてなお生きたその獣の像を造るよう、地に住む者たちに言った。ヨハネの黙示録 13:12-14

「彼の前にいた第一の獣の力」は、496年のクロヴィスに始まり、ヨーロッパの諸王によって教皇権に与えられた力を表している。アメリカ合衆国は、その軍事力に加えて経済力を用い、世界を欺き、強要する。アメリカ合衆国は、日曜礼拝の強制を通して、世界に教皇権を礼拝することを強いる。アメリカ合衆国は、天から火（メッセージの象徴）を降らせることにより大いなる奇跡を行うが、それは情報スーパーハイウェイによって実現され、洗脳とプロパガンダの完全な発達、すなわち催眠術の現代的な現れを表している。イ

スラムが諸国を怒らせるという役割を果たす中で地上にもたらしている危機がエスカレートするため、世界は、竜と獣と偽預言者から成る政教一致の世界的体制を受け入れるように欺かれる。

黙示録13章18節が「獣の数を数えよ」と言うとき、その数とは、第六にして最後の王国を構成するために結集する三つの権力のことである。その666の王国が据えられるとき、「第八の王は七つに属する」という予言的な謎が成就する。その予言的な謎は、ユダ族の獅子がイエス・キリストの黙示の封印を解くときに明らかにされる真理の一部である。

このため、三重の第六王国である終末の王国の謎は、象徴的な七十年のあいだ忘れ去られていた霊的バビロンでもあり、現代のローマでもあり、また獣の全世界的な像でもあって、それは最初のバビロンの王国と異教ローマの第四の王国によって型示されていたが、この真理を理解するのは「賢い者」であると特定されていることによって二重に証しされている。というのも、666の謎は知恵のある者を前提としており、同様に、八番目の王が七つに属しているという謎もそうだからである。

ここに知恵がある。思慮のある者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。ヨハネの黙示録 13:18.

そしてここに、知恵のある心がある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。黙示録 17:9

イエス・キリストの黙示の封印が解かれることは、悪しき者ではなく「賢い者」によって悟られる。黙示録における知恵への二つの言及はいずれも「悟りのある者」を指しており、「賢い者」が悟るのは「知識が増し加わること」である。イエス・キリストの黙示であるこの「知識が増し加わること」とは、第八の王国、すなわち666の三重の王国がダニエル書第二章にも表されているという啓示である。というのも、ミラーの夢の宝石は、終わりの日に十倍明るく輝くことになっているからである。

次の記事でこの研究を続けます。

黙示録には、神の深い事柄が描かれている。その靈感によって記されたこの書に与えられた名、すなわち「黙示録」自体が、これが封じられた書であるという主張に反している。啓示とは、明らかにされるものである。主ご自身が、この書に含まれる奥義をそのしもべに啓示され、すべての人がそれを学べるようにと意図しておられる。その真理は、この地の歴史の終わりの日々生きる者にも、ヨハネの時代に生きた者にも向けられている。この預言に描かれている場面の中には、過去のものもあれば、今まさに起こっているものもある。あるものは、闇の勢力と天の君との間の大いなる戦いの終結を描き出し、またあるものは、新しくされた地における贖われた者たちの勝利と喜びを明らかにする。

黙示録にあるすべての象徴の意味を説明できないからといって、この書を調べ、その中に含まれている真理の意味を知ろうと努めることは無益だと、だれも考えてはならない。これらの奥義をヨハネに啓示されたお方は、真理を熱心に求める者に、天の事柄の一端を味わわせてくださる。真理を受け入れることに心を開いている人は、その教えを理解することができ、また「この預言の言葉を聞き、そこに書かれていること

を守る者」に約束された祝福を与えられる。

黙示録において、聖書のすべての書は合流して終わりを迎える。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言であり、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言のその部分である。天使は命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、この言葉を秘め、終わりの時までこの書を封じよ」。ダニエル書12章4節。『使徒行伝』584、585。